

マスター ↑↓to アーティスト



【第4回】

<古希の少年>

庄司達

立体造形コース 教授



- 1939年 (昭和14年) 京都市生まれ
- 1962年 京都市立美術大学 (現京都市立芸術大学) 彫刻科卒業
- 1964 京都市立美術大学 専攻科彫刻専攻修了
- 1964~66年 京都市立美術大学 教職研究室非常勤講師
- 1966~71年 名古屋市立工芸高等学校 デザイン科教諭
- 1975~99年 名城大学理工学部建築学科非常勤講師
- 1977~85年 名古屋造形芸術短期大学非常勤講師
- 1983~99年 三重大学工学部建築学科非常勤講師

瘦せた頬、蓄えられた白い髭、そして、鋭い眼光。インスタレーションという芸術表現が日本に根付く以前、1960年代から布を使った空間表現の作品を発表し続ける偉大な先覚者。といっても、飄々としたその口ぶりが楽しい。

「絵の好きな高校生だったんです。けど、絵は自分で好きなので人に習うことはない。好きなことは習うことないと思ってたんです。知らないことを習うのが勉強なんだろうと」。学生時代は彫刻を学んだ。しかし、好きにはなれなかった。木、石、セメント…、どの素材にもはっきりと拒絶があった。塊が嫌いだったという。そして、全ての塊に空洞を空けた。薄く削ることで、何かを求めていた。

なぜそうしたいか？ その理由は、青年にはわからなかった。

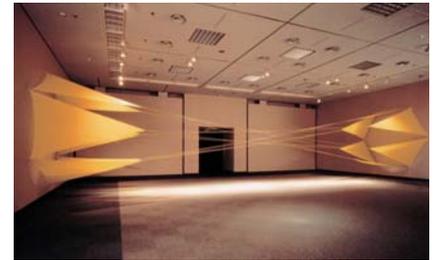
それが空間への希求だったと悟ったのは、すでに教鞭をとっていた27歳のときだった。「閃々と空間への関心はあったんですけど、それを表現する方法が見つからない。何をやっても上手くいかない。穴を開けても、空間としては完全じゃない。そんな頃でした。ある時、僕は必要なものがあって、教えてた高校の購買で買おうと生徒たちの列に並んでたんです。そして、僕の前にはいた男の子が『ハンカチ一枚』と言ってハンカチを買おうしたんですよ。当時は包装もなく、ハンカチが裸のまままで積んであってね。で、その生徒が、『一枚』と言ってピヤッと、ハンカチの束から一枚

取るんですよ。その瞬間、物体から、ハンカチが一枚空間へと浮かぶでしょ。物体から空間へと変貌を見たんです。衝撃だった。いてもたっていられなかった。授業を済ませると、ハンカチを買い占めた。手で引っ張り、飛ばし、天井から糸で吊るした。「もう、うれしくて。うれしくて。初めて空間が見えたんですよ」。美術の準備室は、瞬く間に布で埋め尽くされた。

その様子を、同僚であった先輩教師で画家の久野真(1921~1998)が、現代美術の桜画廊、藤田八栄子(1910~1993)に見せた。個展をやってみないかと誘われた。「僕は、自分の心を表現できたことで、遊びのつもりだったんです。美術と結びつけて考えてなかったんですよ。子供の遊びと一



『白い布による空間 '68-7』



『Beyond the Sailing』



『布と竹・空間軸の内と外』



『Cloth-Behind・MEIRIN』

前頁作品 a: 『白い布による空間 マケットB』

緒ですよ。発表するようなものとは思ってなかったので、それをすぐには引き受けなくて、1年間近く考えましたね。あるいは、自信がなかったのかもしれないともさっぱりという。簡単に自分の弱さを吐露できる強さ。若き日、人生に悩み、芸術に惑い、坐禅会に参加したこともあったという。苦悩に人一倍真摯に向かい合ってきたからこそ、たどり着いた境地が垣間見られる。

初めての個展からは、とんとん拍子で半年も経たないうちに有望な新人作家として世に認められた。しかし、同時にそれは新たな苦悩の始まりでもあった。「表現を見つけて人生にとっては満足ですよ。でも、それがど

こへ向かうのか、どういう宿命を背負って空間に関心を持っている自分なのか。解明しないと、空間の方向が決まらないでしょ。作品の発表と同時に、模索が始まりました。自分とは何か？ 何処から来て、何処へ行くのか？ 当て所もないような問いに、答えを求めて…。作品を作り続けてこられたのも、この己への興味があったからだという。

「空間を追求するほど、茶室の空間が接近してくるわけです」。お茶と華の師範であった父親。父親がその生涯の大半を過ごした茶室への不思議が、心の底にはあったのではという。父親への愛憎がそこに集約されていることは想像に難くない。

ウチとソト、ハレとケ、ときに聖俗が入り混じり行き来する空間。作品を作り始めて30年以上を経て、見えてきたことと話す。少年は、父親を超えようと、大人へと成長する。そして父親の人生を理解し、愛おしさを感じる。厳しさと優しさを湛えた庄司氏のまなざしが、その道程を物語る。「空間を分けることじゃなくてね、分けられた2つの空間を越えて行き来すること。両方を体験できるような仕組みを考えて、見る人に与えることが作品の目的ですね」。鑑賞者へ驚きを与えることも忘れない、初々しい気持ちも、そこにはある。「なかなか死ねないんですよ」少年の笑顔がそこにはあった。